

## マリリン・ストラザーンにおける〈イメージの方法〉

里見龍樹（早稲田大学人間科学学術院）

### 0. はじめに

本稿は、メラネシア民族誌から出発し、現代の人類学において大きな理論的影響力をもつマリリン・ストラザーンの著作を、そこで彼女が実践している人類学／民族誌の方法に関して検討することで、その積極的な受容に資することを旨とするものである。こうしたねらいを追求する上で、本稿では、ストラザーンの著作の、従来必ずしも強調されていないように思われるひとつの側面、すなわち、そこにおいて理論的・方法的に中心的な位置を占める「イメージ (image)」や「美学的＝感性的なもの (the aesthetic)」の概念に注目する<sup>1</sup>。以下で見るように、「イメージ」やそれとしばしば互換的に用いられる「形態・形式 (form)」、「像・形象 (figure)」などの概念、あるいは「美学的＝感性的なもの」の概念は、ストラザーンの多くの著作において一貫して前面に置かれている。またそのために、そうした概念に依拠する彼女の叙述は、しばしば高度に視覚的な性格を備えている<sup>2</sup>。本稿では、以下で仮に「イメージの方法」と呼ぶこうした側面から、ストラザーンの議論の受容・展開の可能性——とくに、生殖医療、知的所有権など彼女自身が扱っている研究対象・テーマに拘束されない展開の可能性——を示したい。

### 1. 『贈与のジェンダー』の視覚性

1988年に出版され、現在までストラザーンの主著とみなされている『贈与のジェンダー』(Strathern 1988。以下、『ジェンダー』と略)は<sup>3</sup>、ジェルが「テキストを読むにつれ、[さまざまな]形態、関係や変容のイメージが心の眼の前に次々とかたちをなしていく」(Gell 1999: 31)と表現している通り、独特の強い視覚的な性格をもった著作である。『ジェンダー』におけるストラザーンの叙述スタイルのそうした特徴は、読者

<sup>1</sup> 本稿と同様、ストラザーンの理論・方法の美学的＝感性的あるいはイメージ論的な側面に注目する解釈はすでに試みられているが (e.g. Gell 1999, 宮崎 2009)、それ以外の多くの場合には、そうした側面は後景化されているように見える (e.g. Holbraad and Pedersen 2010)。

<sup>2</sup> 以下の検討からは、こうした点においてストラザーンが、たとえば芸術を直接の対象とした一連の著作で知られるジェルと比べても、「芸術的なもの」を人類学の方法として活用することに親和性のある理論家であることが明らかになるだろう。なお、これに関連して、ストラザーンがケンブリッジ大学考古学・人類学博物館の学芸員としてキャリアを開始したこと、また、彼女の最初の著作(共著)が、ニューギニア高地の人々における身体装飾についての、膨大な写真図版を含む民族誌 (Strathern and Strathern 1971)であったことを指摘しておきたい。

<sup>3</sup> 『ジェンダー』におけるストラザーンの議論については、たとえば以下を参照 (Josephides 1991, Jolly 1992, Gell 1999, 里見・久保 2013: 268-272)。

にある種の幻想的な映画あるいは影絵芝居を見ているような感覚を抱かせるとさえ言えるほどである。しかも、すぐ後で見るように、ストラザーンも自身の記述スタイルのこうした性格を意識しており、これらのメタファーは決して根拠のないものではない<sup>4</sup>。

分析的に言えば、『ジェンダー』のこうした印象は、叙述の2つのレベルから生じている。まず、周知の通りこの著作は、1960年代にストラザーン自身が調査したニューギニア高地のハーゲン (Hagen) 地域の事例と並んで、他のメラネシア人類学者による多数の民族誌を次から次へと参照・引用するというスタイルで書かれている。たとえば第4章のある箇所では、ハーゲンからパプア・ニューギニアの首都ポート・モレスビーに移住した若者たちが、故郷から都市にやってくる親族の女性たちと対面するという場面が描かれたと思ったら、ジョリーの民族誌が記述するヴァヌアツのペンテコスト島のサ (Sa) の人々が、男性のプランテーションへの出稼ぎと時期を調整しつつ村落でヤムイモ栽培を継続していることが示され、さらには、ニューギニア高地東部のダウロ (Daulo) の人々の間で、女性たちが始めた互助的な「ビジネス」の事例、とくにこの「ビジネス」組織が支部を増やしていく際に行う儀礼的集会の場面がセクストンの民族誌から引用される (Strathern 1988: 77-86) <sup>5</sup>。

『ジェンダー』の記述がある種の映画か影絵を見ているような感覚を抱かせるのは、ひとつにはこのように、多数の民族誌的な「場面」がそこでしばしばめまぐるしく展開・転換されるという事情のためである。しかも、次節で扱うストラザーンの「メラネシア的社会性 (Melanesian sociality)」概念において問題になるように、上で挙げた3つの場面、とくにその1つ目と2つ目で問題にされているのは、描かれているメラネシアの人々自身における視覚的な体験——都市に移住した若者が、目の前に現れた故郷の女性に、自身がそれから逃れてきた親族の互助的義務関係が具現されているのを

---

<sup>4</sup> ここでの影絵芝居というメタファーを、筆者は、ベンヤミンが19世紀フランスに見出す「幻灯 (Fantasmagorie)」というモチーフを念頭に採用している。本稿では立ち入ることができないが、以下で示すような、「イメージ」や「形象」に基づくストラザーンの人類学の方法を検討する上で、同じく「イメージ、形象 (Bild)」に立脚するベンヤミンの方法を連想せずにいることは難しい。たとえば、人類学を含む通常の社会科学の方法とストラザーンの方法の、以下で問題にするような関係は、いわゆる弁証法とベンヤミンにおける「静止状態の弁証法」の関係にも類比しうるように思われる。ストラザーンがベンヤミンに直接に言及した箇所はごく限られるように見受けられるが (たとえば Strathern 1999: 61-62)、『ジェンダー』出版の直前の1987年に人類学とフェミニズムの関係を論じた論文で、ストラザーンは印象的にも、両者の関係を「バリケード」ではなく「敷居の上でのためらい (doorstep hesitation)」であると、端的にベンヤミン的な2つの用語で——ただしベンヤミンに一度も言及することなく——表現している (Strathern 1987: 286)。

<sup>5</sup> なお、これらの引用は、『ジェンダー』においてストラザーンが伝統的なメラネシア社会／文化を実体化・特権化しているという指摘 (たとえば Carrier 1998) を端的に退けるものと思われる。

「見る」というような——なのである。

さらに、『ジェンダー』においてストラザーンはしばしば、提示する個別の民族誌的事例を、その中で視覚的なイメージの交替あるいは変容——「われわれ」にはしばしば不可思議に感じられ、したがって幻覚的・幻想的な印象を与えるような——が生じるものとして描いている。たとえばストラザーンは、第5章で、ジリソンによるニューギニア高地のギミ (Gimi) 民族誌から、「聖なる笛」が中心的な位置を占める、男性の加入儀礼の一シーケンスについての次のような一節を引用している。

新規加入者の若者に笛が開示されるクライマックスの瞬間が近付くと、その瞬間までは何の曖昧さもなく男性的なものであった、男性加入儀礼の歌に出てくる身体の諸象徴は、今や両性的なものになる。男性器の投影である樹木は、鳥（勃起したペニス、豪華な羽根飾りを身に着けた新規加入者、そして死んだ男性の超越的靈魂の象徴）に餌をやる「頭」をもつばかりでなく、「女性的」な〔存在である〕有袋動物（女性の陰毛、「新しい女性器」と呼ばれる新規加入者、そして祖先の霊の子の象徴）の巣となる空洞を内部にもつ。川の上流は、男性の〔精液の〕放出の澄んだ流れであるばかりでなく、歌い手たちによれば、岩の割れ目や山中の洞窟の内部からの流出でもある。ギミの男性たちによれば、樹木や岩の暗い空洞は女性器のようなものであり、川は経血の流れのようなものである。(Gillison 1980: 170. Strathern 1988: 111-112 に引用)

ここでは、儀礼の過程で、あるものの同一性、とくにジェンダー的な同一性が繰り返し書き換えられて提示される——そのように「見られ」、体験される——という事態が描写されている。他者による民族誌からの引用とはいえ、『ジェンダー』のこうした一節はまさしく、次から次へと奇怪な像（イメージ）が映し出され、ある像が映っていると思ったら、いつの間にかその像が別のものに変化し、さらにそれがまもなくまた別の像に変わるという連鎖によって、見る者にある種の幻覚的な体験をさせるような影絵を思わせる。

さて、すでに示唆したように、『ジェンダー』の叙述をこのように映画や影絵になぞらえることは、あながち恣意的ではない。たとえば、1999年の著作『所有、実体、効果』の第2章でストラザーンは、「肖像 (portrait)」を主題にした学術会議での報告の際に、すぐ上でジリソンからの引用に見たようなメラネシアの儀礼的実践・過程を近似的に再現すべく——ストラザーン自身の表現では「模倣 (imitate)」すべく——、多数のスライド写真、具体的にはハーゲンの男性たちの身体装飾の写真を連続的に映し出すプレゼンテーションを試みたというエピソードを記している (Strathern 1999: 29-30)。ここにはストラザーンが、メラネシアの人々における社会的実践およびそれを記述する自身の文体を、まさしく上で指摘したように映画やスライドの上映と感覚的に

類似したものとして理解していることが示唆されている。

ところで、上で『ジェンダー』の叙述に見たような、イメージの水準における視覚的な具体性は、ストラザーンの言う「メラネシア」は地域的に実在する現実ではなく、思考実験のために概念的に構築された「虚構 (fiction)」にすぎないというしばしばなされる理解に対し、一定の留保を要求する。たしかにストラザーン自身『ジェンダー』で、「メラネシア／西洋」という対比をはじめとする自身の分析上の前提の構築性について再三明言している (e.g. Strathern 1988: 6-7)。しかし他方において、上で見たように印象的な視覚的・感性的な具体性をもって描かれる『ジェンダー』の「メラネシア」を、単なる「概念的虚構」と言い切ってしまうことには違和感が否めない。以下でのひとつの課題は、ストラザーンの方法がそうしたイメージの水準でたしかに保持しているように思われる——そして、ストラザーンの「メラネシア」を「虚構」と言い切る論者がおそらくとらえ逃している——ある種の経験性について、それが具体的にはどのような経験性であるのかを明らかにすることにある。

## 2. 「メラネシア的社会性」と形態・イメージ

以上で『ジェンダー』の叙述に見て取ったような独特の視覚的で形象的 (figural) な性格は、著作の副次的な側面とみなされがちな文体・スタイルに関する問題には決してとどまらず、『ジェンダー』でストラザーンが展開する「メラネシア的社会性」論の核心に関わるものである<sup>6</sup>。

『ジェンダー』におけるストラザーンの議論について、筆者は別のところで概説している (里見・久保 2013: 268-272)。大雑把に繰り返すならば、メラネシアにおける社会的現実を記述するモデルとしてストラザーンが提示する「メラネシア的社会性」は、人は、自身の内的能力、あるいは自らを構成している親族関係その他の社会関係を、他者におけるその効果としてあらわれさせ (make appear) (あるいは開示・可視化し (reveal, make visible))、そうすることによって自身の内的能力を知る (know) (知られるようにする (make known)) という関係の上に成り立つものと考えられている (以上の単語はすべて、ストラザーンが一貫して用いている表現である)<sup>7</sup>。それ自体としては不可視の、あるいは「かたち、形態 (form)」をもたない、人の内的能力あるいは社会関係がそれにおいて「開示される」具体的な形態を、ストラザーンは「客体化 [の形態] (objectification)」と呼ぶ。彼女によれば、こうした「開示」は、「適切な美学 (aesthetic)

<sup>6</sup> 本稿では簡潔さのために、スコット (Scott 2007) らにならい、『ジェンダー』その他の著作で提示されたストラザーンのメラネシア観を「メラネシア的社会性」論と呼ぶこととするが、ストラザーン自身はこの用語を必ずしも多用していない。

<sup>7</sup> ただし注意すべきことに、ストラザーンは後に、1999年の『所有、実体、効果』の最終章で、『ジェンダー』におけるこうした視覚性の前提、あるいは「知ること」と「見ること」の同一性の想定を自ら批判している (Strathern 1999: 257-258)。なお、視覚性についてのこうした留保はすでに『ジェンダー』でも述べられていた (Strathern 1988: 361)。

を通じてのみ」、すなわち慣習化された一定の「形態」をとることによってのみなされるのであり、逆に「不適切な仕方ではなされたならば、関係はあらわれない」(Strathern 1988: 181)。『ジェンダー』の、とくに第二部における中心的な記述の対象は、メラネシアにおける、こうした「美学的慣習 (aesthetic convention)」あるいは「美学的拘束 (aesthetic constraints)」(Strathern 1988: 221, 298 など) の下で実現される「客体化」の多様な「形態」にはほかならない(そしてこの「客体化の(美学的=感性的)形態」が、『ジェンダー』や『所有、実体、効果』において、「形象 (figure)」や「イメージ」としばしば言い換えられている)。

『ジェンダー』におけるストラザーンは、知られる通り、こうした「メラネシア的社会性」のモデルによって、「個人」と「社会」を二項対立的に概念化し、「社会」を、もともと「社会的」でない存在として想定された「個人」に押しつけられるべき外在的な力として考える——「社会化 (socialization)」の観念においてのように——西洋的な「社会」概念を批判する。ストラザーンによれば、メラネシアにおいて

問題なのは…… [西洋的な「社会」概念において想定されるような] 外的な諸力ではまったくない。メラネシア人は自らに対し、内的な効力 (internal efficacy) の問題、すなわち身体からそれがなしうることをどのようにして引き出すかという問題を提示しているのである。儀礼は、こうした能力 (capacities) がどのようなものであるかを知る仕方を構築している (Strathern 1988: 102-103)。

ストラザーンのこうした「メラネシア的社会性」のモデル、とくに「社会関係」が具体的・感性的「形態」において「可視化」・「客体化」され、そうすることで「知られる」という関係を、ここで、『ジェンダー』で引用されている、ニューギニア高地のパイエラ (Paieia) の人々における男子思春期儀礼 (male puberty ritual) についてのビアーサックの記述に見てみよう (Strathern 1988: 116-119)。

ビアーサック (Biersack 1982) によれば、パイエラでは、男性 (既婚男性) の身体的健康や強さは妻が月経のたびにおこなう「秘密の」呪術に依存しているとされるのだが、この人々の思春期儀礼においては、少年たちが、集落を離れて森の中に身を隠し——自分たちを不可視化し——、将来の妻とのそうした関係を、「ショウガ女 (Ginger Woman)」と呼ばれる女性の精霊との間で先取りの取り持つことを試みる。それぞれの少年は森の中で、精霊のためにショウガ畑を植える——ちょうど夫が妻に呪術を行ってくれるよう働きかけるように——のだが、この贈与に対し「ショウガ女」が好意的に応えたかどうか、言い換えれば少年がこの精霊との間に肯定的な関係を結ぶことに成功したかどうかは、夫婦の関係においてと同様、この儀礼の間に少年たちの肌が「成長」し、「大きく、美しく」見えるようになったかどうかで「知られる」。すなわち、少年たちと精霊の間の「社会関係」、および、少年たちがもっているかもしれない

「大人になる」という内的・潜在的能力は、彼らの身体という具体的・可視的な「形態」において明らかにされるのである。儀礼が終わって森の中から姿を現した少年たちのからだを村の人々は見るとは、からだが大きく、美しくなっていれば、人々は彼が精霊とうまく関係を取り結んだことを「知り」、逆にからだ小さく貧相なままであれば、そうした関係の樹立が失敗したことが「わかる」とされる。

この過程において、少年たちの、「成長することができる」という内的能力は、言うなれば2種類の他者に依存している。すなわち、ショウガ畑を贈与することによって自身の身体を成長させてもらう女性の精霊と、そうした交渉の結果、身体が成長したかどうかを実際に「見て」判断してもらう村の人々がそれである。パイエラにおいて、少年たちはそれらの他者を通じてのみ、自身の内的能力を実現し、そして「知る」ことができるとされているのであり、ストラザーンの「メラネシア的社会性」とは、視覚性や美的=感性的な「形態」あるいは「あらわれ」を基盤とするこうした関係性のモデルにはほかならない。

『ジェンダー』における自らの作業を、「メラネシアの象徴論を、[すなわち妊婦の]腹のように膨れる畑や男性的である母乳を文化的に記述する試み」(Strathern 1988: 244)と述べるように、ストラザーンは、この著作のほぼ全体を、しばしば「われわれ」には強烈に特異なものと感じられるこうした「客体化の諸形態(objectifications)」を記述・分析するものと定義している。そして先に指摘したような、『ジェンダー』が読者に与える、不思議な映画や影絵を延々と見ているような印象は、そこで展開される「メラネシア的社会性」論のこうした根幹に由来するものと理解することができるのである<sup>8</sup>。

このことはまた、ストラザーンは「社会関係」を分析上の所与とみなしているというしばしばなされる理解が、彼女の理論・方法のイメージ論的な水準——そこにおいて、分析の条件・対象は「社会関係」よりもその「客体化の形態」である——をとらえ逃すものであることをも含意している。さらに、ストラザーンの議論として頻繁に参照される、「人格(personhood)」をめぐる議論も<sup>9</sup>、『ジェンダー』において本来こうした「客体化」論の一部をなすものであることには注意が必要である。「人格は諸関係

---

<sup>8</sup> すでに述べたように、『ジェンダー』をはじめストラザーンの著作は、自身のハーゲン調査からの知見と並び、他のメラネシア人類学者による多くの民族誌の参照・引用から構成されているのだが、以上の議論から、ストラザーンはおそらく他者の民族誌を、それを読む際に遭遇する際立って印象的な視覚的イメージ・形象に注目するという仕方で引用しているのだという推測が可能となる。かつ、こうした読み方・引用の仕方は、ストラザーンにとって、自身が実際にハーゲンでフィールドワークをしていてそうした形象に遭遇し、それが後に考察の手がかりになることと、おそらく根本においては変わらないものである。

<sup>9</sup> 知られる通り、『ジェンダー』においてストラザーンは、レーナルトとマリオットを引きつつ、「分割不可能な個人(individual)」として概念化された西洋的な人格に対し、メラネシアにおける人格を、さまざまな「社会関係」からなる「分人(dividual)」として概念化している(Strathern 1988: ch. 10 など)。

の客体化された形態である」(Strathern 1988:294)と述べられるように、そこでストラザーンは「人格」を、メラネシアにおける社会関係の「客体化」のもっとも基本的な「形態」——こうした「客体化」が「人格化 (personification)」と呼ばれている——として、したがってひとつの「形象」・「イメージ」として位置付けているのである<sup>10</sup>。

### 3. 芸術批評との類比

さて、メラネシアの社会的現実の行われ方における、視覚的な形態や美学的＝感性的水準のこうした重要性を、ストラザーンはときに、近代西洋における芸術、それもとくに芸術批評との一見驚くべき類比によって強調してみせる。

たとえば、『所有、実体、効果』の第1章でストラザーンは、自身の民族誌の実践において、フィールドワークにおける「イメージ」の体験、具体的には、1960年代のはじめでの調査の際に目にしたという、贈与交換のために棒に吊されて運ばれる真珠貝——当時のハーゲンにおける交換財——の視覚的なイメージが決定的な契機をなしてきたと述べている。彼女は次のように記している。

こうした贈与は.....それを見た人々から反応を引き出そうとしているように思われた。それらは一般に、公開の文脈において (in a public context)、批評・判断を行う (critical and judgemental) 観衆の前で、批評・判断を行う受け手へと手渡されたのである。形態を [そのように] 吟味することは、まさしくその [吟味の] ために、形態は適切な性質をともなうのみあらわれることができるのであり、さもなければそもそもあらわれさえしない、ということを知らせた。.....そうした意味で、これらのものは美学的な効果を持っているのである。またそうした意味で、それらは欧米文化における「美術品 (art objects)」の地位と似たようなものを、少なくとも、あるものがそもそも美術とみなされるかどうかは、形態の適切さについての議論 [の問題] であるという理由から、もっている (Strathern 1999: 15)。

近代西洋における芸術批評、すなわち「美学的＝感性的な形態」をめぐる認識と議論の領域と、ここで言及されているような贈与交換をその範型とする「メラネシア的

---

<sup>10</sup> 「形象・イメージとしての人格」というこうした視点は、『ジェンダー』とはまったく異なる文脈において、同時代 (1980年代後半～90年代初頭) の一連の人類学・民族誌批判についての検討を、それらの内部に明示的・暗示的に見出される諸々の「人物像 (figures)」——「単独のフィールドワーカー」から「旅行者」へ、そしてさらに「観光客」や「消費者」、そして「コスモポリタン」を経て「サイボーグ」へ——の間を移動するというかたちで展開する『部分的つながり』(Strathern 2004、初版1991年)の前半部でも、興味深い仕方でも示されている。そこでは、同時代における人類学・民族誌批判が、端的に美学的＝感性的な問題としてとらえられているといえる。

社会性」のこうした類比は<sup>11</sup>、これまで見てきたようなストラザーンの記述・分析の方法が、人類学をも含めた通常の社会科学に対してどれほど異質であるかをよく示している。今日における社会科学的な「常識」は、上でストラザーンが引き合いに出すような芸術批評が、どれほど歴史的・地域的、さらには階層的に限定されたものであるかを教えている。こうした「常識」からすれば、そのような芸術批評という制度をメラネシアの人々における実践と類比してみせるということは、あらゆる文化的・社会的差異を飛び越えたきわめて粗雑で暴力的な——したがってもちろん、誤った——見方であることになる。しかし、上のような一節や、メラネシアにおける社会関係の「客体化」の「美学的＝感性的諸形態」を一貫して叙述する『ジェンダー』においてストラザーンが実践しているのは、まさしくそうした飛躍（と見えるもの）によって、メラネシアの社会的現実を、美学的＝感性的なイメージの水準において民族誌的に記述するということにほかならないのである。

加えてここで注目したいのは、上の引用における「公開の文脈」での「批評・判断」という表現が示唆するように、芸術批評とのこうした類比が、メラネシアにおけるイメージの実践に、ある種のコミュニケーション、すなわち芸術作品を前にしてその美学的＝感性的体験についての批評・判断を取り交わす「公衆 (the public)」に見られるようなコミュニケーションの性格を認めるものとなっている点である<sup>12</sup>。さらにストラザーンにおいて、こうした美学的＝感性的なコミュニケーションは、一面において、メラネシアの人々のみならず人類学者をも巻き込むものとなっている。

たとえば、「実体の美学」と題された『所有、実体、効果』第3章をストラザーンは、ニューギニアのエトロ (Etoro) の人々についてのケリーの民族誌から、かつてこの人々において太った赤ん坊は生まれてすぐ母親によって殺されたという、ストラザーン自身にとって衝撃的な、「追い払うことができないイメージ<sup>13</sup>」 (Strathern 1999: 45) を引

---

<sup>11</sup> 儀礼の過程を終えた少年たちが森の中から姿をあらわし、集落の人々の「美学的な批評・判断」へと自らをさらす、先に見たパイエラの思春期儀礼にもこうした類比が当てはまることは言うまでもない。なお、芸術（批評）と民族誌の明示的な類比は、本稿の最終節で言及する論文 (Strathern 1990) にも見られる。

<sup>12</sup> ストラザーンにおける「美学的＝感性的 (aesthetic)」というカント的な用語にジェルが注意をうながしているように (Gell 1999: 37-38)、メラネシアの社会的現実と芸術批評のこうした類比は、ストラザーンの「イメージの方法」とカントの美学・「構想力」——まさしくイメージ形成の能力——論の根本的な親和性を示唆するものと思われる。なお、興味深いことに、『ジェンダー』における可視性と知識（知ること）の同一視を後になって自己批判した『所有、実体、効果』の最終章において、ストラザーンは、カント美学、とくにその崇高論を全面的に援用したドルトンのメラネシア民族誌に対して異議を唱えている (Strathern 1999: 256-260)。

<sup>13</sup> こうした表現は、ストラザーンの「イメージの方法」が、通常の社会科学的な方法が含意する「統制 (control)」とは対照的に、人類学者の側におけるある種の受動性をともなうものであることを示唆するものとして興味深い。



用することから始めている。こうした嬰兒殺しの慣習を、ストラザーンはケリーの議論を受け、「生氣 (life-force)」を人々の間でやり取り・移動されなければならないものと考え、そうした「生氣」によって構成される不可視の内的身体の状態が、可視的な外的身体——その見え方——によって他の人々に「伝達 (communicate)」(Strathern 1999: 50) されるというエトロの「美学的=感性的」な慣習によって説明する。すなわち、本来個人がその内的身体に溜め込むべきではないとされている「生氣」を過剰に保持していると見られる太った赤ん坊は、そうした外見のゆえに生まれつきの妖術の能力の疑いをかけられ、殺害されていたというのである。

注目すべきはここにおいて、太った赤ん坊の身体という「イメージ」、そしてそれが社会関係——この場合、「生氣」の譲渡と蓄蔵の状態——を「伝える」という「美学的=感性的な効果」(Strathern 1999: 50) が、エトロの人々によってと同時に、人類学者——この場合正確には、他者の民族誌の読み手——としてのストラザーンによってもある種決定的な仕方で経験されているという点である。この例が示唆するように、ストラザーンの方法には、問題になっているのが誰にとつてのイメージであるのかということについての根本的なあいまいさが、「現地の人々/人類学者/読者」という通常の区別を逸脱し、あいまいさとして解消されないままで組み込まれているように思われる<sup>14</sup>。というのも、先に見たような芸術の鑑賞・批評との類比は、形態・イメージを「見る」という美学的=感性的な体験が、それ自体として、人々の間に体験の(差異を含んだ)共有とそれについてのコミュニケーションを可能にすることを含意している。これまで見てきたように、ストラザーンによれば、メラネシアの人々は視覚的・感性的なイメージ・形態をお互いに提示し合っており、それを見て社会関係を知ることがメラネシアにおける社会的現実の構成・実践にほかならないとされる。そうだとすれば、ちょうど美術館で、異なる人々が「同じ」作品をそれぞれ微妙に異なる仕方で見るとしてさらに、この体験について議論を交わす——のと同じように、人類学者がそうしたイメージを、たとえ現地の人々とは違った仕方においてであれ観察し記述することは、メラネシアの人々が現に行っているイメージの実践の、多かれ少なかれ屈折した展開・延長として、あくまで可能であるはずである<sup>15</sup>。

<sup>14</sup> 『部分的つながり』においてもストラザーンは、比較民族誌的な記述を構成する「類比 (analogy)」について、「現地の人々が創出する類比/人類学者が創出する類比」の間を歩き来しながら、最終的には、メラネシアの人々の実践と比較民族誌の間に一種の同型性・「並行関係 (parallel)」(Strathern 2004: 119) を見出している。同書の議論については以下を参照されたい (里見・久保 2013: 272-275)。

<sup>15</sup> なお、ストラザーンにおける「イメージの方法」をこうした美学的=感性的なコミュニケーションとして規定することは、民族誌をしばしば人類学者と調査地の人々との「対話」あるいは「ポリフォニー」として構想した、いわゆるポストモダン/ポストコロニアル人類学との類似性を示唆するかもしれない。しかし、ストラザーン自身は『部分的つながり』でポストモダニズムとの距離を再三表明しており、次節で見るようなストラザーンの叙述方法も、表面的な類似性からポストモダン流の「断片の並置」として理解すること

こうした見方においては、現地の人々がイメージを見る仕方と人類学者——さらには民族誌の読者——がイメージを見る仕方が「同じ」であるという実証主義的な保証はないにせよ、イメージ・形象をそれぞれが「見ることができる」という感性的な可能性は否定されない。先に見た、スライド上映によってメラネシアの人々の実践を「模倣」しようとしたというエピソードにも見られるように、ストラザーンが、1980～90年代のいわゆるポストモダン／ポストコロニアル人類学を特徴付けたような、調査地の人々と人類学者の間の認識論的な断絶をめぐる苦悩と、少なくとも一面で——その他面については後述する——無縁に見えるという事情は、彼女の方法のこうした前提から理解することができるだろう<sup>16</sup>。また、先に提起した、ストラザーンの著作がもっているある種の経験性をどのように定義するかという問題にも、ここでさしあたり、それはイメージの水準における感性的な経験性である、と答えることができる。こうした意味において、イメージの水準に注目することそれ自体が含意する美学的＝感性的な肯定性＝実証性 (positivity) ——言い換えれば、上で述べたようなコミュニケーションの可能性——は、ストラザーンにおける人類学・民族誌の可能性の条件をなすものとして理解されるべきなのである。

#### 4. イメージの連鎖・交替

さて、『ジェンダー』などの著作におけるストラザーンの叙述が映画か影絵のような印象を与えるものであること、さらにはストラザーン自らがそうした類似性を意識していることについては先に述べたが、映画や影絵とのこうした類比には、単なる視覚性以上のものが含意されている。ここで指摘したいのは、そこに含まれた平面性——まさしくスクリーンを見ているような感覚——という契機であり、事実、『ジェンダー』の叙述は、同じ平面、すなわちストラザーンの言うところの社会関係のさまざまな「客体化」という平面の上で、次から次へとイメージが入れ替わるという性格をたしかにもっている<sup>17</sup>。

---

はできない。『ジェンダー』における「西洋／メラネシア」という対比が、あくまで「西洋」の内部で展開されるものであるという議論 (Strathern 1988: 4, 16 など) が示唆するように、ストラザーンの方法はおそらく、メラネシアにおける人格とまさしく同様、自己を分割することによって拡張する、ある種のモノローグ——もはやモノローグではないようなモノローグ——として理解されるべきであろう。

<sup>16</sup> 同じ理由から、『ジェンダー』その他の著作における「西洋／メラネシア」の対比、および後者による前者の相対化という印象にもかかわらず、ストラザーンの比較民族誌の意図を、「相対化」という基本的に批判的・否定的な観念によって理解するのは適切でない。ストラザーンにおいて相対化に代わる、より肯定的で産出的な意図は、彼女の方法論における中心的な概念である「拡張 (extension)」（たとえば Strathern 1988: 16-17, 136; Strathern 2004: 38-40）に読み取られるべきであり、本稿での「コミュニケーション」も、この「拡張」の概念を事実上言い換えるものとなっている。

<sup>17</sup> 本稿では立ち入らないが、「客体化の形態」としての「人格」に対比される主体 (subject)・

一見感覚的で恣意的に過ぎないように見えるこうした印象は、先に見た視覚性と同様、実際にはストラザーンの「メラネシア的社会性」論に明確な基礎をもっている。ストラザーンの議論において重要なもうひとつの点は、上で見たような、「イメージ」あるいは「感性的形態」への「客体化」というかたちでの社会関係の把握や実現が、そうしたイメージ・形態（形象）の反復的な交替・連鎖というかたちで行われるということである。『ジェンダー』の少し後に書かれた『部分的つながり』（Strathern 2004、初版 1991 年）の中でストラザーンは、あるイメージ・形象が、別のイメージによって取って代われ、さらにそれがまた別のイメージによって置き換えられるという交替・連鎖の過程あるいは運動を、ワグナーの用語を借りて「除去＝置き換え（obviation）」と呼び（Strathern 2004: 79）、それを次のように規定している。

あるイメージが創出する効果は、また別のイメージとして提示されることができる。ある像（figure）は、それと対になる像（counter-figure）を「生み出す」ものとして見られるのである。われわれが通常パフォーマンスや儀礼の社会的文脈とみなすものは、比喩の連鎖のように、一連の像と対象からなるものでありえ、それぞれの像はその前の像とまさしく同じように提示され、かつそれによって引き出されたかのように提示されるのである（Strathern 2004: 80）。

先に見たギミの加入儀礼における、＜笛→男性器→樹木→内部の空洞→有袋動物→女性器＞というようにジェンダー化されたイメージが次から次へと喚起・開示されるシーケンスは、こうした「除去＝置き換え」の典型的な例として見るができる。ワグナーとストラザーンにおけるこの概念において重要なのは、ちょうど、自己の内的能力、あるいは自己を構成している諸々の社会関係が、他者におけるそのあらわれというかたちでのみ開示・実現されるという「メラネシア的社会性」のモデルにおいてと同じように、ある形態あるいはイメージの意味——それに含まれているもの——は、それがさらに別のイメージに取って代わられることによって明らかにされるという関係である<sup>18</sup>。ここでは、イメージからイメージへの、言うなれば横方向の移動が想

---

行為主体（agent）のあり方が論じられる『ジェンダー』の第 10 章は、それまで論じられてきた「客体化」の可能性の条件としての行為（action）が問題にされることで、それまでの、とくに第 8・9 章の叙述の平面性が言うなれば「破られる」——まさしく映画や影絵のスクリーンが垂直に突き抜けられるように——部分として注目値する。『ジェンダー』第 10 章の読解は、今後のストラザーン受容における重要な課題だろう。

<sup>18</sup> 「個別の契機や形態は、別のものを生じさせたり、別のものによって取って代わられたりする。言うなれば、人はイメージがどのようにイメージを生み出すかを目撃するのである。……人々は、イメージを他のイメージの拡張として用いる。……もし、[あるイメージに] 含まれているものが [それによって] 引き出される、あるいは喚起されるものによって知られるようになるならば、意味を明らかにすることは、[イメージを] 用いることになる」（Strathern 2004: 81）。

定されているのだが、これは、「意味作用 (signification)」の図式に基づく通常の「解釈」、すなわち具体的・感性的なイメージ (シニフィアン) から、それが意味・表象しているもの (シニフィエ)、たとえば社会関係へと至る縦方向の運動——人類学を含む通常の社会科学的な分析をも構成するところの——とは根本的に異質である<sup>19</sup>。

このように見れば、『ジェンダー』における叙述が、同じスクリーンの上でイメージ・形象が入れ替わり立ち替わり展開されているかのような平面性の印象を与えるという先の指摘が、ストラザーンの理論・方法に直接の根拠をもつものであることが明らかであろう。「メラネシア的社会性」は上のように、イメージからイメージへの横方向の運動として展開されるものとして概念化されているのであり、『部分的つながり』でストラザーンが、ワグナーの「除去＝置き換えによる分析 (obviational analysis)」(Strathern 2004: 79) という用語によって指示しているように、そうした運動を記述するストラザーンの分析も——ここに含まれた微妙な関係については最終節で論じるが——、基本的にはそうしたイメージの連鎖をたどるものとなる。あるいは、そうした連鎖をたどること自体が、「メラネシア的社会性」の分析あるいは「説明 (exposition)」を構成するものとされるのである。

## 5. 所有権の形象

以上で見てきたような、イメージや感性的形象に関わるストラザーンの方法は、『ジェンダー』およびそれ以後の著作で再三展開されている所有権をめぐる議論でも明確な位置を占めている。

論文「ネットワークを切断する」(Strathern 1996) は、所有権、とくに知的所有権を、一方でラトゥールらのアクター・ネットワーク理論に批評を加え、他方でソロモン諸島マライタ島の南部に住むアレアレ ('Are'are) の人々の葬儀についてのドゥ＝コッペの民族誌 (de Coppet 1981) を参照しつつ論じるという複雑な構成をもっている。冒頭でストラザーンは、カメルーンやハーゲンで、家長や女性が「貯金箱」や「商店」のイメージで語られるという、一見ごく些細だが奇妙な印象を与える事実を紹介している。これらのイメージにストラザーンは、「流れ」とその「停止」、あるいは「ネットワーク」とその「切断」という対比、より正確には、「流れ」が「止まる」(「ネットワーク」が「切断される」) ことによってある種のイメージ・形象が形成されるという関係を見出す<sup>20</sup>。ここでは、『ジェンダー』において「人格」が社会関係の主要な「客体

<sup>19</sup> ジェルのよく知られた『ジェンダー』解釈 (Gell 1999) は、先に引用したようにこの著作の視覚的・イメージ的な性格を適切に指摘しているが、ストラザーンにおけるイメージや形象——ジェルの用語では「あらわれ (appearance)」——を、基本的に「関係」(社会関係) との垂直的な意味作用の関係に置いている点には疑問もある。

<sup>20</sup> この背景には、ウィーナーらの人類学者が再三論じ、ストラザーンも『ジェンダー』で触れているように、メラネシア地域でこうした「運動、流れ」とその「停止、切断」という象徴論的な対比がしばしば見出されるという事実がある (Weiner 1991、Strathern 1988:

化の形態」として位置付けられていたのと同様、「人」がしばしば「血」（親族関係の実体）や財の流れを止め、貯め込む形象として見られている。そして、ストラザーンの議論の要点は、西洋世界における所有権もそれと同じ「流れの停止」あるいは「ネットワークの切断」として成り立っているということにある<sup>21</sup>。

ストラザーンによれば、所有権の主張、たとえば特許の申請においては、ある発明に必要な諸条件からなる、理論的には無限に広がる「ネットワーク」が、暫定的な境界付けによって「切断」されなければならない（Strathern 1996: 523-524）。他方、こうした「切断」によって成立する、特許・所有権の対象となるモノ、たとえば加工された細胞は逆に、その個別性の中に、それを成立させたさまざまな要素からなる「ネットワーク」を集約・凝縮（condense）して含み込むものとして、「メラネシア的社会性」論における「人格」の形象と類似の仕方であられることになる。

所有権がこうした「ネットワーク」の「切断」と個別的な形象への「凝縮」・「包含」によって成り立っていることを、ストラザーンは、ドゥ＝コッペが記述するアレアレの葬儀とのアクロバティックな類比によって強調してみせる（Strathern 1996: 525ff.）<sup>22</sup>。ドゥ＝コッペによれば、アレアレにおいて生きた「人」は、異なる人々・世代の間で流通・循環（circulate）する「からだ」と「息」と「影」（あるいは「名前」という3つの異なる要素からなる複合体として考えられている。こうした人の死に際しては、生前の人を構成していた他者との多様なやり取り・交換——言い換えれば「社会関係」——が停止され、諸要素はすべて貝貨に交換され清算される。このようにアレアレにおける貝貨は、「流れ」すなわち諸要素の交換・やり取りという社会関係の停止・切断を具現し、かつそうした諸関係を自らの内部に凝縮・集約して包含するモノあるいは形象としてある。そしてストラザーンはこれを、先に論じた特許の対象としての発明物と類比的であるとするのである。

論文「ネットワークを切断する」におけるこうした議論は、所有権の問題がストラザーンにおけるイメージ論的な方法の内部にどのように位置付けられているかを示すとともに、メラネシア人類学における贈与・交換論の系譜に対するストラザーンの関

---

371)。

<sup>21</sup> 「西洋／メラネシア」という対比の図式、後者による前者の相対化という印象を与える『ジェンダー』とは異なり、ここでストラザーンが、イメージの水準における西洋とメラネシアの類似性に注目していることにも注意されたい。

<sup>22</sup> 興味深いことに、ドゥ＝コッペの民族誌（de Coppet 1981）は、アレアレの葬儀が、臨時の舞台を設営し、そこで異なる段階に分かれた貝貨の贈与を行うなど、高度に視覚的で上演的な性格をもったものであることを示している。ただしドゥ＝コッペ自身は、メラネシア人類学における贈与・交換論の系譜とデュモン流の全体論に忠実に、アレアレ社会の「全体性」を諸要素の「流通・循環（circulation）」として概念化することにもつばら関心があり、そうした視覚的な性格を分析においてとくに重視していない。他方、本稿の視点からすれば、ドゥ＝コッペの民族誌のそうした視覚性が、ストラザーンがそれを取り上げる動機付けになっていることは十分に理解できる。

係の一面を示すものとして示唆的である。ストラザーンは以上のように、ドゥ＝コッペのアレアレ民族誌に、「流れ」とその「停止」、すなわち「交換のネットワーク」とその停止・切断を具現する「貨幣という形象」という対比を見出し、前者が切断されその内部に集約・包含される形象としての後者に注目している。このような視点は、ここでドゥ＝コッペに代表されているところの、交換関係を第一義的な「社会関係」として、したがってある種特権的な記述・分析対象として位置付けてきた伝統的なメラネシア人類学に対して明確な緊張関係にある。こうした意味において、ストラザーンの議論を、ジェンダーその他の視点を追加して複雑化された「またひとつ新たな」交換論として理解すること、あるいは、ストラザーンの理論的立場を単に「関係論的」と規定することはできないのである<sup>23</sup>。

## 6. 「コード」と「イメージ」

以上で見てきたように、ストラザーンは自身の方法を、「メラネシア的社会性」を構成するイメージ・形態の連鎖的な交替を記述するものとして考えている。またそこでは、メラネシアにおける実践と芸術批評の類比が示唆するような、美学的＝感性的な水準におけるある種のコミュニケーションの可能性が、民族誌の経験性の肯定的な条件として半ば暗示的に想定されていた。他方、同じくすでに見たように、自身の記述・分析が、メラネシアの人々における実践とどこまで、どのような意味で「同じ」であるといえるのか、あるいはまた、自身の記述・分析が立脚する「イメージ」が具体的には誰にとってのイメージであるのかという問題について、ストラザーンの方法は一面的であまいな、あるいはそうしたあまいさ自体を自らの肯定的・産出的な可能性として引き受けるものになっていた。

本稿の結びとして、ストラザーンの「イメージの方法」におけるこうしたあまいさ・両義性を含んだ経験性を、1990年の論文「歴史のモノたち」(Strathern 1990)に即してあらためて検討したい<sup>24</sup>。この論文でストラザーンは、それ自体としては意味をもたない個別的な「モノ」や偶然的な「出来事」が、社会的・文化的なシステムという「文脈」の内部に位置付けられることではじめて意味を獲得するという、人類学的な

<sup>23</sup> たとえばトーマスがかつて、既存の贈与・交換論と『ジェンダー』をそのように連続させる理解を示したことがある(Thomas 1992: 326)。なお以上の点は、論文「ネットワークを切断する」でラトゥールへの違和感が表明されているのと同様、フランス人類学における交換論的社会観の系譜に忠実であることを自認するヴィヴェイロス＝デ＝カストロ(たとえば Viveiros de Castro 2010)のような理論家とストラザーンとの間の不調和な一面——両者が互いに示す好意的・肯定的な評価にもかかわらず——を示唆しているようにも思われる。なお里見(2014)では、ここで指摘した、メラネシア交換論の批判者としてのストラザーンという側面を全面的に展開している。

<sup>24</sup> そこでの批判対象であるサーリンズの『歴史の島々』をもじった表題をもつこの論文は、1980年代にとくにオセアニア人類学の分野で勃興した、いわゆる歴史人類学をストラザーンが直接に批評したものとして重要である。

物質文化研究と歴史人類学に共通する想定——そして、そうした想定の人ラネシアなど他地域への無批判的な適用——を批判している。そして彼女は、モノや出来事についてのこれとは異質な見方を、ワグナーによる「コード／イメージ」という二分法を援用することで示そうとする (Strathern 1990: 34)。ワグナーによれば、西洋的な社会科学を支えてきた、ある対象を「文脈」の中に位置付けて解釈するという「コード」あるいは「コーディング」の操作に対し、「イメージ」とは、ストラザーンの多くの著作がまさしく同じ用語で論じているように、通常「文脈」と呼ばれるような諸々の関連を、自らの中へと包含しているようなモノ・象徴のあり方をいう (ストラザーンの議論はもちろん、メラネシアにおいてモノや出来事はしばしばこうした「イメージ」としてあるというものである)。

「コード／イメージ」のこうした対比は、歴史人類学や物質文化研究のみならず、従来の人類学のほとんど全体が、「コード」による説明を偏重し、したがってメラネシアその他の地域の人々の「イメージ」の経験をつねにとらえそこなうものであったことを含意している。それでは、これまでとらえそこなわれてきた「イメージ」の契機——それは、メラネシアにおける社会的現実を民族誌的にとらえる可能性に等しいであろう——を自らに内在化した人類学は、どのようにして可能なのか。ここでストラザーンが注目するのは、彼女がこれまで主流の社会・文化人類学から遠ざけられ、周縁化されてきたという博物館——もちろん、ここでは民族学的な博物館が想定されている——のあり方である。というのも、美術館と同様に、展示物に対する美学的な鑑賞態度が一面で行われうる博物館は、その限りにおいて、文脈化されない「モノとしてのモノ」(Strathern 1990: 39)の宇宙として、「イメージ」をそれ自体として保ちうる場としての意義をもっている<sup>25</sup>。その上でストラザーンは、「ひょっとすると美術のギャラリーのように見える博物館は、メラネシアにおけるイメージの構築に対する一定の類似物をわれわれに示してくれているかもしれない」(Strathern 1990: 40)と述べ、「イメージ」の宇宙としての博物館のあり方を、メラネシアの社会的現実、さらにはそれを記述する民族誌のあり方へと明示的に類比してみせる。

しかし、ストラザーンが認めるところによれば、こうした類似性は部分的なものに過ぎず、メラネシアにおける社会的現実と、博物館における「われわれ」のモノ・「イメージ」の体験は同一のものではありえない。というのも、博物館でのモノの形態との向き合いにおいて「われわれ」が得るのは、西洋近代における「美学」の観念がすでに含意しているように、基本的には個人的な審美的＝感性的体験に過ぎない。それとは異なる、単に審美的であるだけではない体験のためには、「われわれ」はそのモノに関わるメラネシアその他の地域の社会的・文化的文脈を知る必要があるが、しかし

---

<sup>25</sup> 「博物館の展示物にどれほどの意味や用途が付与されていようとも、展示は形態に対して注意を引き寄せるのであり、見る人をはっきりと自身の知覚に向き合わせ、そして展示物を見ることによって自分のものにするという行為に向き合わせる」(Strathern 1990: 40)。

そうした知識に基づく体験は、すでに「イメージ」それ自体を離れた「コード」でしかない。こうした必然的な不一致のために、「われわれ」は、いずれもそれ自体としては不十分でしかない2つの立場の間を行き来することしかできないのだが、ここでストラザーンは、彼女の方法に関して決定的と思われる示唆を述べる。すなわち、「イメージ」の体験を求める上で、「われわれ」あるいは人類学者に可能なのは、「イメージ／コード」というそうした2つの立場・アプローチの間の移動、往復運動それ自体を記述の方法へと内在化することである (Strathern 1990: 40)、という示唆がそれである<sup>26</sup>。

博物館というモチーフから導かれたこうした指針は、本稿で検討してきたような、自身の記述とメラネシアの現実との一致が不可能であることを認識しつつ、そうした現実との結び付きを、他ならぬイメージの水準において確保しようとするストラザーンの記述・分析方法をまさしく特徴付けるものとなっている。本稿の結びとして、論文「歴史のモノたち」で以上のように示された、可能なのは往復運動に過ぎないが、しかし、そうした往復運動はあくまで可能であるという根本的な肯定性を、ストラザーンの「イメージの方法」の根底にある肯定性として、そして1980年代以降の人類学・民族誌批判を踏まえたその現代的意義として位置付けることとしたい。

#### 【後記】

本稿のもととなった原稿は、2010年11月、東京大学大学院総合文化研究科の演習ではじめて発表された。その後筆者は、ストラザーンに関する、あるいはストラザーンから多大な影響を受けた一連の論考を発表してきた。ストラザーンの人類学の全体像を論じた論文(里見・久保 2013)は、本稿のもととなる原稿からの直接の発展であり、その他の民族誌的な論考(里見 2014、2017)においても、本稿で言うストラザーンの「イメージの方法」が全面的に参照されている。この10年間に、国内外ではストラザーンの人類学に関する論説が一定数出版されたが(e.g. 橋爪 2017、Holbraad and Pedersen 2010、Street and Copeman 2014)、本稿のように、「イメージ」や「美学」の概念を前景化させた解釈は必ずしも多くないと思われる。そのような事情を踏まえ、日本におけるストラザーン受容史の一エピソードとして、また、この受容を深化させるための一つの足掛かりとして、もととなる原稿にマイナーな変更を加えて本稿をここに発表することとした。なお、改稿の都合上、2010年以降に刊行された邦訳は参照していない。

---

<sup>26</sup> 『ジェンダー』で展開される「西洋／メラネシア」という対比が、実際には「われわれ」の西洋的な概念的枠組みの内部における対比でしかない、という先に見た留保を想起されたい。『ジェンダー』や『部分的つながり』での方法論的な議論との連続線上において、「歴史のモノたち」で提示される「往復運動」はまさしく、イメージの水準における「われわれ」の概念の「拡張」を意味するもののように思われる。



【参考文献】

Biersack, Aletta

1982 Ginger Gardens for the Ginger Woman: Rites and Passages in a Melanesian Society. *Man* 17(2): 239-258.

Carrier, James G.

1998 Property and Social Relations in Melanesian Anthropology. In *Property Relations: Renewing the Anthropological Tradition*. C. M. Hann (ed.), pp.85-103. Cambridge University Press.

Coppet, Daniel de

1981 The Life-Giving Death. In *Mortality and Immortality: The Anthropology and Archaeology of Death*. S. C. Humphreys and Helen Kind (eds.), pp.175-203. London.

Gell, Alfred

1999 Strathernograms, or the Semiotics of Mixed Metaphors. In *The Art of Anthropology*. pp.29-75. Berg.

Gillison, Gillian S.

1980 Images of Nature in Gimi Thought. In *Nature, Culture and Gender*. Carol P. MacCormack and Marilyn Strathern (eds.), pp. 143-173. Cambridge University Press.

橋爪太作

2017 「社会を持たない人々のなかで社会科学をする：マリリン・ストラザーン『部分的つながり』をめぐって」『*相関社会科学*』26: 79-85.

Holbraad, Martin and Morten Axel Pedersen

2010 Planet M: The Intense Abstraction of Marilyn Strathern. *Anthropological Theory* 9(4):371-394.

Jolly, Margaret

1992 Partible Persons and Multiple Authors. *Pacific Studies* 15(1):137-149.

Josephides, Lisette

1991 Metaphors, Metathemes, and the Construction of Sociality: A Critique of the New Melanesian Ethnography. *Man (N. S.)* 26:145-161.

宮崎広和

2009 『希望という方法』以文社.

里見龍樹

2014 「人類学／民族誌の『自然』への転回——メラネシアからの素描」『*現代思想*』42(1): 148-161.

2017 『「海に住まうこと」の民族誌：ソロモン諸島マライタ島北部における社会的動態と自然環境』風響社.

里見龍樹・久保明教

2013 「身体の産出、概念の延長——マリリン・ストラザーンにおけるメラネシア、民族誌、新生殖技術をめぐって」『思想』1066: 264-282.

Scott, Michael W.

2007 *The Severed Snake: Matrilineages, Making Place, and a Melanesian Christianity in Southeast Solomon Islands*. Carolina Academic Press.

Strathern, Andrew and Strathern, Marilyn

1971 *Self-Decoration in Mount Hagen*. Duckworth.

Strathern, Marilyn

1987 An Awkward Relationship: The Case of Feminism and Anthropology. *Signs: Journal of Women in Culture and Society* 12(2):276-292.

1988 *The Gender of the Gift: Problems with Women and Problems with Society in Melanesia*. University of California Press.

1990 Artefacts of History: Events and the Interpretation of Images. In *Culture and History in the Pacific*. Jukka Siikala (ed.), pp.25-44. The Finnish Anthropological Society.

1996 Cutting the Network. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 2(3):517-535.

1999 *Property, Substance and Effect*. Athlone Press.

2004 *Partial Connections, Updated Edition*. Altamira Press.

Street, Alice and Jacob Copeman

2014 Social Theory after Strathern: An Introduction. *Theory, Culture and Society* 31(2/3): 7-37.

Thomas, Nicholas

1992 Contrasts: Marriage and Identity in Western Fiji. *Oceania* 62(4):317-329.

Viveiros de Castro, Eduardo

2010 Intensive Filiation and Demonic Alliance. In *Deleuzian Intersections: Science, Technology, Anthropology*. Casper Bruun Jensen and Kjetil Rødje (eds.), pp.219-253. Berghahn.

Weiner, James F.

1991 *The Empty Place: Poetry, Space, and Being among the Foi of Papua New Guinea*. Indiana University Press.